

『一条摂政御集』論

——私家集の特性を視点として——

加 藤 佑 美

はじめに

『一条摂政御集』は藤原伊尹の家集で、一九四首が収載されている。全体は一番歌から四一番歌までの第一部、四二番歌から一九二番歌までの第二部、一九三番歌と一九四番歌の第三部と三部構成になっており、それぞれ編者が異なるとされる。中でも第一部「とよかげ」は、大藏史生倉橋豊蔭という卑官で架空の人物が主人公に据えられており、伊尹の恋の歌を中心に歌物語的にまとめられている。そのため自撰の可能性が高いと考えられ、これらを中心に解釈が進められてきた。特に、歌物語的冒頭部分の作り方や物語の展開が、それぞれ『伊勢集』と『伊勢物語』の影響を強く受けていることについて指摘されることが多い。とは言え、こうした『伊勢集』や『伊勢物語』の他に影響を受けている作品や和歌についての言及が必要と思われる。加えて和歌の表現の観点では、『古今集』や『後撰集』の影響を指摘する先行研究があるものの、こうした勅撰集以外の歌集、特に『伊勢集』以外の私家集の影響について考察しているものは殆どないと言える。

また第一部が重視されてきた一方で、他撰の可能性が高い第二部

と、『拾遺集』から補入された第三部は、第一部に比べ編纂意図が読み取りにくいことから、あまり焦点を置かれることがなかったように思われる。

しかし、私家集は一部分だけでなく全体を通して見ることで、より精密に編纂意図を捉えたり、文学史上の意義を考察したりできると考える。本論では、伊尹歌の表現の特徴を再検討し、第二部の形態や意義を考察し、併せ見ることで、『一条摂政御集』という作品を捉え直し、王朝私家集史において新たな立場を築いたことを示したい。

一 勅撰集との関係から見る伊尹歌の特徴

『注釈』¹⁾や『平安私家集』²⁾では、『一条摂政御集』の伊尹の歌の語句や表現が、『古今集』や『後撰集』、『古今六帖』、『拾遺集』に収載される歌によつていたり、それらの歌と同じ発想で詠まれていたりすることの指摘が見られる。また遠藤由紀氏は伊尹の歌を中心に、『古今集』、『後撰集』の歌をどのように撰取しているのか、撰取の実態について検討をしている³⁾。伊尹の歌の特徴を整理するにあたって、諸注釈書で指摘が多く見られる『古今集』、『後撰集』の歌と比較する。

『古今集』は最も多くの指摘が見られたが、前三者において複数の歌から語句を撰取した場合、一つの歌から語句を撰取した場合、発想を撰取した場合の三つの方法が確認できた。まず複数の歌から撰取されていると思しき歌として、一四九番歌を取り上げる。

いにしへのののをぎし心あらばこよひばかりはそよとこたへよ
〔一条撰政御集〕一四九

いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

〔古今集〕卷十七・雑歌上・よみ人しらず・八八七
ふかくさののべの桜し心あらばことしばかりはずみぞめにさけ

「いにしへののの」の語句は、『後撰集』八二三番歌などにも見えている。ただし八二三番歌の語句は『新大系後撰集』によると八八七番歌によるとあり、同時代において「いにしへの野中のし水」の語句は八八七番歌を基盤にして撰取されている可能性が考えられる。また『注釈』や『平安私家集』にて「いにしへのののをぎ」が元の仲良かった妻を指すとある。そしてその根拠として『注釈』は「いにしへの野中のし水」が昔は水が冷たくて良かったということで元の仲良かった妻を指し、「ぬるけれど」で今はあまり仲が良くなくなってきている意を、「本の心をしる人ぞくむ」で昔の仲の良かった頃を懐かしむ気持ちを表すことを指摘している。八八七番歌の下の句が「自分の元の心を知る人は、この心を汲み取ってくれる」と解せることから「いにしへの野中のし水」が自分の心を汲み取ってくれる人と解釈できるため、八八七番歌を撰取している場合は「い

にしへのののをぎ」が自分の心を汲んでくれる人、すなわち妻を指すと解釈することはできると考えられる。これらのことから「いにしへのののをぎ」は八八七番歌の歌意を踏まえつつ語句を取り入れている可能性を指摘できよう。

一方「心あらば」は、一四九番歌が「萩に心があるならば、今夜だけはなびいておくれ」と萩に頼むように詠んでいると解せる一方で、八三三番歌は「深草の野辺の桜に心があるならば、今年だけは墨染めの色に咲いてほしい」と桜に頼むように詠んでいると解せる。つまりこの二首は、歌意の構成や調子が似通っていると見られる。ここから八三三番歌の語句を調子と共に撰取していると考えられる。したがって一四九番歌は、八八七番歌の意を意識して織り込んだり、八三三番歌の調子を取り入れたりして詠まれた歌だと解釈する。次に、一つの歌から語句が撰取されていると思しき歌として、八八番歌を取り上げる。

神かけてまたもちかへといひつべしおもひおもはずさかまほし
さに
〔一条撰政御集〕八八

かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまさ
れる
〔古今集〕卷十四・恋歌四・在原業平朝臣・七〇五

「おもひおもはず」の語句は、『新大系古今集』の「おもひおもはず」の脚注に「至り至らぬ」と同じく古今和歌集の表現」とあり、『古今集』の影響が窺える表現であることは言えよう。八八番歌は相手が自分を思っているのか聞いてみたいかと詠んでいるのに対し、七〇五番歌は相手が自分を思っているのか聞いてみたいのか

聞きたくても聞けなかったと詠んでおり、歌の意は合致しない。しかし八八番歌の上の句に「神かけてまたもちかへといひつべし」とあり、神かけてもう一度誓えと言つてみなさいと詠むことで、自分は誓うことができることを言い、その意を通して自身の思いの深さを表していると思われる。一方、七〇五番歌は雨から相手の心を察知して自分の身の程を知り、更に涙を流していると詠むことで、相手が思っていないことを悲しむほどに自身の思いが深いことを示していると解釈できる。つまり、どちらの歌も相手に対する自身の思いの深さを婉曲的に表現しているのだ。歌の意は合致しないものの、率直に自身の思いの深さを表現しない手法が同じであると見られることから、七〇五番歌の影響を窺えると言える。したがって六九番歌は、本歌の語句を採つたことに加え、詠者の感情表現の方法も取り入れて詠まれたと考える。

それから、発想を撰取しているともしき歌として、一〇四番歌を取り上げる。

おもひいでてけさはけぬべしよもすがらおきかへりつるきくの
うへのつゆ

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

〔古今集〕卷十・物名・素性法師・四七〇

一〇四番歌は「おもひ」に思うことと火を、「おきかへり」に置く意と起きている意を掛けており、菊の上に置かれた露のように消え入りそうなほど相手を恋しく思っていることを詠んでいる。『後撰集』五八一番歌のように「おき」に置く意と起きている意を掛ける掛

詞が用いられているだけでなく露が儂い意を含んでいる歌や、『貫之集』一三五番歌のように菊の上にある露が詠み込まれた歌は散見する。しかしそれらを併せて詠まれたと解せる歌は、同時代や近時代には挙げた二首以外に見受けられなかった。一方、四七〇番歌は「おき」と「思ひ」に一〇四番歌と同じ掛詞が用いられていると解することができ、恋によって身が消え入りそうだということを詠んでいると見られる。これらの共通点が見出せることから、一〇四番歌は四七〇番歌を参考にして詠まれた可能性が指摘できる。したがって一〇四番歌は、本歌の歌意や技巧を取り込んで詠まれていると見る。

以上、伊尹歌が『古今集』にどのように影響を受けたのかを見てきた。語句や発想の撰取において、本歌の語句を撰取するだけでなく、歌意を踏まえたり技巧や構成を取り入れたりしていたことが確認できた。このことから『古今集』は、伊尹にとって教本のような立場を築いていたと考えられる。『古今集』は伊尹が生誕した頃には既に存在していた、唯一の勅撰集である。撰者によって秀歌が集められたこの集を、伊尹が模範にすべきと考えたと推測することはできよう。伊尹は『古今集』の語句や構成、発想などを元に、和歌についての知識を培い感性を養ったと考える。

一方『後撰集』は『古今集』の場合と異なり、前三者において語句の組み合わせや発想の指摘が見られなかった。まず複数の歌から語句が撰取されていると思しき歌として、一四二番歌を取り上げる。

つゆよりもいかなるみとかなりぬらんおきところなきけさの心
地は

〔一条撰政御集〕一四二

わがためはいとどあさくやなりぬらん野中のし水ふかさまされ
ば
〔後撰集〕卷十一・恋三・よみ人しらず・七八四

かずしらぬ思ひは君にあるものをおき所なき心地こそすれ

〔後撰集〕卷十四・恋六・よみ人しらず・一〇五二

「なりぬらん」は、一四二番歌が「露よりもどんな儂い身となつてしまつたのだらう」と自分の身を対象に詠んでいる一方、七八四番歌は「自分にとっては一層心が浅くなつてきているのだらうか」と相手の気持ちの程度を詠んでいる。どちらも変化したことを表しているものの、表現しているものは異なり、字義の共通性が窺えるのみである。むしろ三六番歌が自分の身を対象に詠んでいると解せる分、この歌の方が共通点を見出しやすいと考える。

一方「おきどころなき」の語句は、『千類集』七九番歌などにも見える。一四二番歌は露よりも儂い身になつてしまつたことを、身の置き所のない今朝の気持ちを根拠に詠んでいる。一方、一〇五二番歌は「数えられないほどの私の思いはあなたの元にあるけれども、そのあなたが傍にいますので、それがどちらにあるのか分からない気持ちがあることだ」と自分の思いに対して「おき所なき」が用いられている。つまり「なりぬらん」と同様に、字義の共通性は少々窺えるものの、歌意や技巧などの共通性は見出し難いと考える。この語句も、七九番歌の方が詠み方が類似していると見られる。

したがって一四二番歌は、『後撰集』の歌と同じ語句が詠み込まれた歌が見えるものの、詠み方は同時代や近時代の他の歌人のものの中に近いものが見えると捉える。

次に、一つの歌から語句が撰取されているともしき歌として、一

〇一番歌を取り上げる。

わかれてはきのふけふこそへだてつれちよしもへたるここのち
みする
〔一条撰政御集〕一〇二

まどろまぬものからうたてしかすがにうつつにもあらぬ心地の
みする
〔後撰集〕卷十二・恋四・よみ人しらず・八七七

一〇一番歌は「別れてか昨日今日と日を隔てたが、千夜も経つた気持ちがあることだ」と相手に数日会わないだけでも恋い焦がれる思いが強いことを訴えていると解せる。一方、八七七番歌は「微睡みはしないが、そうは言つても、一層酷く現実ではないような気持ちがあることだ」と解釈できる。「ここのみする」の意味合いは一致していると捉えられるが、歌の大意は異なっていると解せるため、字義の一致と見る。

したがって一〇一番歌は、本歌を見て語句が用いられた可能性が高いものの、意を踏まえているとは解釈し難い歌だと捉える。

以上、伊尹歌が『後撰集』からどのように影響を受けたのかを見てきた。語句の撰取において、表現のみを撰取したと解せる歌が多いことを理解した。このことから『後撰集』は、伊尹にとつて新たな表現を得るための手段だったと考えられる。『後撰集』は伊尹が編纂に従事した勅撰集である。ある程度和歌の知識を積み重ね、感性を磨いてきた頃の伊尹は、『後撰集』の編纂に携わり様々な歌人の歌を見ることで、更に和歌の腕を磨いたと推測される。

二 私家集との関係から見る伊尹歌の特徴

前述したように、勅撰集では『古今集』『後撰集』の影響を多く指摘されるが、物語では『伊勢物語』に、私家集では『伊勢集』に影響を受けているという見解が多く見られる。しかし、歌の表現の観点に立った場合、この四作品以外にも影響を与えた作品や人物の歌があると推測する。『後撰集』の編纂に従事していたことから、同時代の歌人の歌には目を通していた可能性は高く、加えて赤の他人よりも親類であれば、私家集を見る機会も多くあっただろう。これらの条件に、妻の井殿の両親である中務と信明が該当すると考えらる。

『中務集』には『一条摂政御集』にある歌が入集している。それは六七・六八番歌である。

とねぎみのははぎみは、ゐどの、なかつかさのむすめ
よしの山たきのいとさへとちづれどはやくしりにしこゑはわす
れず
（『一条摂政御集』六七）

かへし

いはなみはたかかりしかどよしの川かよはでこほるふゆぞへに
ける
（『一条摂政御集』六八）

御屏風の歌、内によみてたてまつりしを見給ひて、右大将
よしのやまたきのいとさへとちたれどはやくしりにしこゑはわ
すれず
（書陵部蔵御所本『中務集』一四七）

返し

いはなみはたかかりしかどよしのやまかよはでこほる冬ぞへに

ける

（書陵部蔵御所本『中務集』一四八）

一四七・一四八番歌は書陵部蔵御所本と資経本にて見られる歌であることが、『中務集注釈』にて指摘されている。⁶⁾六七・六八番歌は井殿と伊尹の贈答歌と解釈されてきたが、一四七・一四八番歌では伊尹と中務の贈答である旨が記されている。六七番歌の詞書は解釈し難い点があり、『注釈』や『平安私家集』は、本来は「ゐどの」が「ははおや」についての注記だったのが、「あどの」に「なかつかさのつすめ」と注を付けたと推測している。しかし、その場合であつても六七・六八番歌と一四七・一四八番歌とで贈答相手に違いが生じており、『平安私家集』は六八番歌が中務の代詠だった可能性を指摘している。しかし『注釈』は、詞書の「右大将」の表記から一四七番歌の詠者として、伊尹以外に父師輔や師輔の弟師尹の可能性が考えられることを指摘している。それぞれの私家集以外には他出が見られないため、この贈答歌の詠者を結論づけることはできない。しかしいずれの場合であっても、伊尹の周辺の人物が中務や井殿の家と交流があったと言えよう。したがって、伊尹は中務の歌を見る機会があつた可能性が高いことを指摘する。

『中務集』の人集歌を見たところで、伊尹歌と信明歌とを比較する。一首目に一七五番歌を取り上げる。

なつのよもまきのいたどをいたづらにあけてかひなくおもほゆる
るかな
（『一条摂政御集』一七五）

夏の夜もまきの板戸もいたづらにあけてくやくしくおもほゆるか
な
（『信明集』一〇六）

二首目に一七八番歌を取り上げる。

一七五番歌と一〇六番歌とは「まきのいたど」が共通して詠まれている。「まきのいたど」の語句は、『古今集』六九〇番歌や『後撰集』五八九番歌などの用例が確認できるが、『一条摂政御集』以前に見られる用例には、私家集のものはあまり見受けられない。伊

人しれぬみとしおもへばあかつきのとり」とともにぞねはなかれける
（『一条摂政御集』一七八）

眺のねざめのみみにききしかば鳥より外のごゑはせざりき

（『信明集』二二〇）

尹と同時代・近時代の歌人は、あまり歌材にしていなかった語句と考えられる。一七五番歌は「夏の夜が明けるように、槇の板戸を空しく開けるのは甲斐のないことだ思われる」と解せる一方、一〇六番歌は「夏の夜が開けるように、槇の板戸も空しく開けるのは残念に思われる」と解釈でき、この二首はほぼ同じ歌意であると捉えられ、六九〇番歌が「あなたが来るのか、私が行くのか」というためらいで、槇の板戸を閉ざさずに寝てしまうことになったものだ」と解せることから、「まきのいたど」は男女が会う意を含んでいると解釈でき、一七五番歌も一〇六番歌もその意で「まきのいたど」が詠み込まれていると捉え得る。語句の使い方が一致しているだけならば、一七五番歌と一〇六番歌がそれぞれ六九〇番歌を踏まえて詠んだ可能性が否めない。しかし語句の使い方に加え、歌意もほぼ一致していることから、一七五番歌は一〇六番歌に着想を得て詠まれた可能性が高いと言える。もちろん、一〇六番歌が一七五番歌を元にして詠まれた可能性も考えられる。しかし一〇六番歌は一〇五番歌「しのめのあけざりしかば夜もすがらまきのとよりは立帰りにし」の返歌であるため、一七五番歌を見て詠んだと見るよりも、一〇五番歌に合わせて詠んだと捉える方が適当だろう。したがって一七五番歌は、一〇六番歌に影響を受けて詠んだ歌である可能性を指摘できると考える。

一七八番歌と二二〇番歌とは「あかつき」と「とり」が共通して詠まれている。「あかつき」と「とり」の語句の組み合わせは、『伊勢集』一六七番歌などにも見えるものの、『一条摂政御集』以前の用例はあまり見受けられない。二二〇番歌は「一八九番歌「あかつきになくゆふつげのわがこゑにおとらぬ音をぞ鳴きてかへりし」の返歌であるため、一八九番歌を元にして詠まれたと見られる。しかし、一六七番歌に詠み込まれている語句が、位置も含めてほぼ一致していることから、この歌によっている可能性が高いと言えよう。

一七八番歌は「あなたに知られない身と思えば、明け方の鳥と共に泣けてくることだ」と解せる。一方、二二〇番歌は「明け方のふと目が覚めた折りの耳で聞いたならば、鳥以外の声はしなかった」と解釈でき、明け方に鳥が鳴いている景が同じと捉えられる。ところで「一八九番歌の詞書に「さてきたるにえあふまじきやうありて、かへりてつとめて」とあり、相手の所に来たものの、会えずに帰った状況で帰った早朝に詠まれた歌だと分かる。一方、一七八番歌の「人しれぬ」は「注釈」や『平安私家集』では相手に知ってもらえない意であることが指摘されている。これを押さえて一七八番歌と二二〇番歌とを対照すると、男が女に認められなかったと

いう状況が似通っていると捉えられる。これらのことから一七八番歌を詠むにあたって、一一九・一二〇番歌を参照し、状況を想起させながら詠んだ可能性があると推測される。

以上、伊尹歌と『信明集』歌を比較してきた。一七五番歌のように語句が位置までほぼ一致する歌が確認できた一方で、一七八番歌のように贈答歌としてまとめて見た可能性もある歌があることが確認できた。これらの用例から、用いている語句は他の用例も確認できたものの、歌意や詠歌状況の共通点が多いことから、『信明集』の歌を参照していた可能性が高いことが推測される。また同じ語句が詠み込まれた歌だけでなく、対となる歌も見ていた可能性が指摘でき、贈答歌として参照していたと言えよう。信明は中務の夫であり、『信明集』には中務との贈答歌が多く入集している。今回取り上げた二首も、中務との贈答歌である可能性が高い歌である。したがって伊尹は、同時代の歌人の歌を見るにあたって、親類を辿って見ていた可能性が考えられる。

三 第二部における配列意識

第二部では哀傷歌を始め、恋の歌や離別歌、四季の歌が配置されている。ただし四季の歌と分類したものは、別本『本院侍従集』の部分以外には見られなかったため、第二部では哀傷歌、恋の歌、離別歌、雑歌の四種類が見られると言えよう。大半を恋の歌が占める一方で哀傷歌は九首見られ、離別歌や雑歌と比べると、四六番歌から四八番歌、五〇番歌、五二番歌から五五番歌と前半部に偏って並んでいる。また後述するが、いずれも詠歌状況と贈答相手が明確であり、ある程度時系列に沿った配列になっている。以後、この九首

を哀傷歌的歌群と呼ぶ。

私家集の基本的な形式は、屏風歌などの晴れの歌から始まるとされる。第二部を部分ごとではなく一つのまとまりで見た場合、その構成は一般的な私家集を意識してできているのではないかと推測する。

同時代や近時代の私家集の巻頭歌を、身分や性別ごとに分類して表一〜三に整理した。

〔表一〕専門的歌人の私家集の冒頭の分類

分類	私家集名
春の歌	基俊集、公任集、清原元輔集〔前田尊閣蔵〕、源兼澄集、遍昭集、深養父集、大式高遠集、能因集、能宣集、重之の子の僧集
夏の歌	忠岑集
恋の歌	小野篁集、惟成弁集、道信集、敦忠集
屏風歌	貫之集、隆信集、恵慶集、大中臣頼基集
歌合	源道濟集、清原元輔集〔歌仙家集本〕、経衡集
題詠	巨衡集
賀	公忠集、兼盛集
雑歌	長能集
生活詠	為頼集
羈旅歌	重之集、増基法師集（※冒頭部分の後は秋の歌）
離別歌	実方集
哀傷歌	信明集、仲文集

【表二 身分が高い人の私家集の冒頭の種類】

分類	私家集名
春の歌	定頼集、清慎公集
恋の歌	小野宮殿実頼集、元良親王集（※冒頭部分の後も恋の歌）
雑歌	九条殿師輔集、御堂関白集

【表三 女流歌人の私家集の冒頭の種類】

分類	私家集名
春の歌	重之女集、式子内親王集、馬内侍集、和泉式部集、小侍従集、小大君集、大斎院前の御集、四条宮下野集
秋の歌	赤染衛門集、相模集「異本」
恋の歌	檜垣媼集、本院侍従集、伊勢集（※冒頭部分の後は屏風歌）、伊勢大輔集、斎宮女御集（※本人の詠ではない）
屏風歌	相模集「流布本」、中務集
羈旅歌	小馬命婦集
離別歌	紫式部集、土御門院女房
雑歌	相如集

いずれの私家集を見ても冒頭に哀傷歌が置かれることはあまりなく、一般的な形態だったとは言いがたいことが分かる。第二部は、この中では『信明集』や『仲文集』に形態が近いと言えよう。

第二部の形態が『信明集』と『仲文集』に近いことを確認したところで、この二作品と冒頭を比較する。

【信明集（正保版歌仙家集本）】

- 亭子院うせさせ給ひつる御ぶくにて
- 一 去年の春枝にてをりし藤の花ころもにきんと思ひけんやは
またのとし御はてに
- 二 故郷の梢のみち秋はてておのがちりぢりなるがわびしさ
(中略)

朱雀院うせさせ給ひてける時

- 四六 かなしさの月日にそへて今よりは我が身ひとつにとまるべ
きかな

御いみはてて人人いでける日

- 四七 しぐれつつ梢はここにうつるとも露におくれし秋は忘れじ

『信明集』は一、二番歌が哀傷歌で、三番歌以降は屏風歌である。島田良二氏は『平安前期私家集の研究』で、「1・2番歌は哀傷歌で、この二首は46番歌の前に位置すると、3〜45番歌までの屏風歌が冒頭歌群になり、次に哀傷歌四首が続いて、構成の破綻がない。そういう錯簡はあり得ることである」と述べている。正保版歌仙家集本に限るが、屏風歌の後に哀傷歌が続く形態を指摘できる。また一、二、四六、四七番歌を一つの歌群として見た場合、亭子院や朱雀院といった高貴な身分の人物が亡くなった際の哀傷歌が配置されているため、哀傷歌であると同時に公的な要素を持つ歌と見られる。次に『仲文集』を確認する。

【仲文集（書陵部蔵本）】

けさうじ侍りける女のちぎりて侍りけるが、なくなり

にければ、いとかなしくて、女のはらからのもとへいひやりける

一 ながれてとちぎりしことはゆくさきのなみだのうへをいふにざりける

『仲文集』の一番歌は『小町集』を始め『新後拾遺集』『金玉集』『三十六人撰』『三十人撰』に入集している。『私家集全釈叢書22 藤原仲文集全釈』ではこれに触れて「この巻頭歌は、仲文集とそれほど時代が変わらない頃から、仲文の代表歌の一つとされていたことがわかる。いずれにせよ、当時から、歌壇の大御所とも言うべき公任に認められていたことが注目される」とある。また『仲文集』には一番歌の後に哀傷歌とも解釈できる歌が見られる。それは二四番歌である。

本来は一番歌の後に配列されていたのが二三番歌の後に竄入したり、歌の種類ではない配列を試みたりした可能性も考えられる。しかし竄入の可能性を除けば、どのような場合であっても哀傷歌を冒頭に置くという意識は見出し難い。むしろ仲文を象徴する歌を置くという意図で配列したと考えるべきだろう。竄入についても『藤原仲文集全釈』ではその指摘は見られず、二五番歌が二四番歌の返歌として配列されていることから、その可能性は低いと考えられる。

以上のことから『仲文集』は意識して哀傷歌を巻頭に配置したと考えるべく、第二部の編纂意識とは異なる意図で編まれた歌集だと言えるだろう。一方『信明集』は、島田氏の指摘する形態を原形と見て、屏風歌の歌群を冒頭部分と捉えた場合、冒頭部分の後に哀傷歌が続く形態が類似している。したがって『信明集』の形態は類似

点が多いことが指摘できる。

他の私家集と比較したところで、第二部の哀傷歌的歌群を確認する。前述したように哀傷歌的歌群は九首あるが、それを時間軸や贈答相手ごとに整理すると表四になる。

【表四 各哀傷歌の詠歌状況】

歌番号	亡くなった時期	亡くなった人物
四一	天曆六年（九五二）	本院の女御（藤原慶子）
四六～四八	天曆九年（九五五）	野内侍（野宰相娘）
五〇	天慶六年（九四三）	藤原敦忠
五二～五五	康保三年（九七二）二月五日以降	藤原惟賢

五二～五五番歌の詠歌年次は、厳密には分からない。『注釈』には「惟賢の卒時は正確にはわからぬが、康保三年正月以降のことと考えられる」とある他、補注に「五二、五三の歌に『ほととぎす』の語がよまれていることからすれば初夏の頃と考えられる」とある。また同補注では『拾遺集』二八九番歌に次の歌があることが指摘されており、詠者の「藤原のぶかた」が伊尹の次男の惟賢である可能性が高いことから、康保三年正月までは生存していたと推測される。

しかし長沼英二氏は、この藤原惟賢は伊尹の次男ではないと指摘している。更に長沼氏は、『拾遺集』二八九番歌の詠歌年次が『大日本史料』によると康保三年二月五日であることから、この日までの生存を確認している。加えて惟賢が右兵衛佐のまま死んだと推測し、惟賢の没後すぐに右兵衛佐に任ぜられた人物の記録を考慮して「藤原惟賢は康保三年四月一日以前の初夏のある日に死出の旅に

上ったと考えたい」と述べている。今回は多くの指摘が見られる『拾遺集』二八九番歌の詠歌年次を参考に、藤原惟賢の亡くなった時期を康保二月五日以降とした。

これを踏まえて詠歌年次を確認すると、五〇番歌のみ時間がやや前後するが、他は概ね時系列に沿っている。また亡くなった人物や贈答相手が明確である。また五〇番歌以外は亡くなった人物について、その周辺人物に死を悼みいたわる旨の和歌を詠み送っており、哀傷歌が公的、つまり晴れの歌の性質を持つと見られる。例えば、一四四番歌は、詞書に「ちちおとどいせて給てのころ、はぎにさして」とあり、父師輔が亡くなった時期に、それと関連させて恋の歌を詠み贈ったと分かる。この歌は哀傷歌の要素を持ちつつも、恋の歌と言えるだろう。一方、四二番歌の贈答相手の本院侍従は、伊尹と男女の関係があったことが『注釈』などで指摘されており、伊尹と贈答相手との関係は類似している。しかし、四二番歌から恋の歌の要素は見出し難く、本院の女御の卒去を哀悼する内容と見て取れる。したがって、本院侍従と伊尹が普段は親しい間柄であったも、四二番歌は公的なものとして詠んだ歌だと位置付けることができ、晴れの歌としての性質を持つと捉えられる。同じようなことは四六～四八番歌、五〇番歌、五二～五五番歌でも言えると考ええる。

以上、哀傷歌の歌群を見てきた。第二部は、冒頭に哀傷歌がまともに配置されている。これは他の私家集には見出し難い変則的な形態である。その上、この哀傷歌の歌群は公的な要素を持つと考え得る。それぞれの歌の詠歌状況に加えて、『信明集』の一、二、四六、四七番歌の四首を見ても、当時哀傷歌が公的な要素を持ち得たとと言えるだろう。

『伊勢集』の、物語的冒頭部分の後に公的な歌が続く形態は、『一条撰政御集』に共通して見られる。第一部が『伊勢集』の影響を受けていることは、今までも多く指摘されてきたが、このような形態の面でも影響を受けていると見られる。

ただし、第二部の形態の面では屏風歌を置く『伊勢集』よりも『信明集』の影響を強く受けているのではないかと考える。伊尹は身分の高さ故に、屏風歌のような公的な歌を詠むことがなかった。もちろん、身分の高い人物が屏風歌を詠む機会が皆無だったとは考え難い。例えば、藤原彰子入内の折の屏風歌詠進では、花山院を始め藤原公任、藤原実資、藤原斉信、藤原行成など大臣相当の人物もが屏風歌を詠んでいる。しかし、伊尹が生存していた頃は、そのような機会はなかったと考え得る。伊尹が生存していた延長二年から天禄三年の前後の勅撰集や私家集を確認すると、三代集では『拾遺集』が最も多く屏風歌が見られる。中でも貫之は入集歌数が最多であり、四十六首を確認できたものの、大臣相当の位階の時に屏風歌を詠んでいる用例は見つけられなかった。加えて、表二で取り上げた私家集からは屏風歌が見つけられなかったため、伊尹が生存していた頃は、身分の高い人が屏風歌を詠む機会はなかった可能性が高いと考ええる。

前述したように、伊尹は屏風歌のような公的な歌を詠むことがなかった。そこで、屏風歌の後に哀傷歌が続く『信明集』の形態に着目し、詠んでいない屏風歌以外の形態に倣って、第二部の冒頭を作り上げた可能性が考えられる。たとえ第二部が他撰であったとしても、編者は伊尹に近い人物の手によるものと推定されよう。伊尹は井殿と関係があり、井殿の母親が中務で、中務が源信明と関係があったこ

とから、伊尹及びその周辺が『信明集』を見ていた可能性は非常に高い。物語的冒頭部分の作り方を『伊勢集』に倣い、歌集の一つの型として『信明集』の形態を基にすることで、歌人としての専門性や格を歌集に持たせると同時に、仮託という手段で差異を出し、歌物語的冒頭部分を持つ私家集の一つの型を改めて作り上げたと言えよう。内容面だけでなく形態にも着目することで、『伊勢集』から始まる私家集の形態の流れも辿れるのではないかと考える。

おわりに

伊尹歌を『古今集』『後撰集』『信明集』『中務集』の四作品と照らし合わせ、影響の受け方を再検討した。『古今集』の影響を窺える歌は、本歌の語句だけでなく歌意を踏まえたり、技巧や構成をも取り入れたりしていたことを確認し、伊尹にとって『古今集』は教本のような立場を築いていたと考えた。一方『後撰集』は、本歌の語句を取り入れているものの、歌意や構成を踏まえていると解釈できる歌は少なかったため、新たな表現を見出すための手段と伊尹が捉えていた可能性を指摘した。加えて『信明集』『中務集』を、『後撰集』と同様に新たな表現を得るために見ていたと推測した。

また第二部の形態が哀傷歌を冒頭に配置していることを押さえた。そしてその形態が同時代や近時代の他の私家集には見受けられないことを確認し、『信明集』によっている可能性を指摘した。それを踏まえて、『一条摂政御集』は『伊勢集』のような物語的冒頭部分と、『信明集』のような形態を併せ持つことで、歌人としての格と物語的要素を持つ私家集の一つの型を築いたと考えた。

以上のことから、『一条摂政御集』は表現や構成においては『古

今集』歌の流れを汲み、『後撰集』『中務集』といった同時代の歌人の表現を取り入れた歌が詠まれ、『伊勢集』と『信明集』の要素と形態を組み合わせて作られた歌集であることを推定した。

なお、本稿では歌の本文引用及び歌番号は、特に断らない限り『新編国歌大観』により、私に傍線と波線を付した。また歌集名は『古今集』などの省略形を用いた。

注(1) 平安文学輪読会『一条摂政御集注釈』（塙書房、一九八一年）

(2) 大養廉他『新日本古典文学大系28 平安私家集』（岩波書店、一九九四年）

(3) 遠藤由紀『「一条摂政御集」研究―藤原伊尹の和歌―』（北海道教育大学札幌分校国文学第二研究室『国文学研究叢書7和歌と説話文 学篇 II』一九九一年五月）

(4) 片桐洋一他『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）

(5) 小島憲之他『新日本古典文学大系5 古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）

(6) 高野晴代他『中務集注釈（三）』（『日本女子大学紀要文学部』六〇巻、二〇一一年三月）

(7) 本論では、人の死を哀悼したり、悲嘆する人を慰めたわつたりする内容の歌を哀傷歌と見る。

(8) 一五二番歌から一六四番歌は、別本『本院侍従集』が混入した部分であると『注釈』などで指摘されている。

(9) 今回は大臣より低い身分の男性を専門的歌人、大臣相当の官位に叙された人物や皇族の男性を身分が高い人、女性を女流歌人として取り上げ

た。分類はそれぞれの私家集の注釈書を参考に、筆者が行った。また諸本で巻頭歌が異なった作品は系統を付してそれぞれ記し、物語的冒頭部分を持つ作品はその後に配列されている歌の分類も載せた。なお『為頼集』は詞書がないことに加え、『私家集全釈叢書14 為頼集全釈』（風間書房、一九九四年）に「何か特別な感興をおぼえた折の生活詠」とあつたため、それを元に生活詠に区分した。

(10) 島田良二『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八年）

(11) 片桐洋一他 私家集全釈叢書22『藤原仲文集全釈』（風間書房、一九九八年）

(12) 長沼英二『一条摂政御集』五二・五三番歌の詠歌年次について（『二松学舎大学人文論叢』第三五号、一九八七年三月）

受贈雑誌（一）

愛知教育大学大学院国語研究

愛知教育大学大学院国語教育専攻

愛知県立大学説林

愛知県立大学国文学会

愛知淑徳大学国語国文

愛知淑徳大学国文学会

愛知大学國文學

愛知大学國文學會

愛文

愛媛大学法文学部国語国文学会

青山語文

青山学院大学日本文学会

宇大国語論究

宇都宮大学国語教育学会

歌子

実践女子短期大学部日本語コミ

愛媛国文研究

ユニケーション学科研究室

愛媛国文研究

愛媛国語国文学会

愛媛国文と教育

愛媛県高等学校教育研究会国語部会

大妻国文

愛媛大学教育学部国語国文学会

大妻女子大学紀要

大妻女子大学国文学会

大妻女子大学草稿・テキスト研

大妻女子大学

究所研究所年報

大妻女子大学草稿・テキスト研

岡大国文論稿

究所

お茶の水女子大学國文

岡山大学言語国語国文学会

香川大学国文研究

お茶の水女子大学国語国文学会

学芸国語国文学

香川大学国文学会

東京学芸大学国語国文学会

東京学芸大学国語国文学会